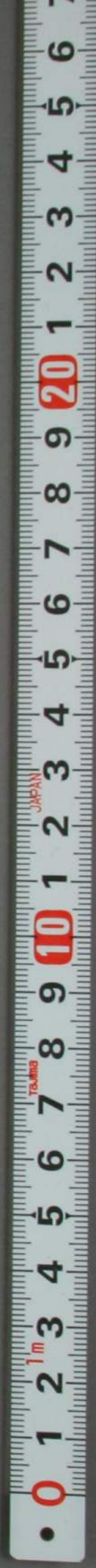




八  
野  
馳  
此  
有  
也



特  
5  
2240



利  
2.24.0  
巻

師走の月夜

三冊

慶安二年己未十二月

著者

北村季吟之

一名 獨玉吟

三冊の  
琴の假字

天保二年辛卯如月

慶安二年ヨリ今年迄

百八十五年後

柳亭種彦  
花

明治四十一年五月十四日  
富山房記念 此書贈



此譜といふを古今集とすまはる中なる  
よきものありてはるるをいふらんゆかりの  
八雲乃御抄なり其か務経くゆは九門の  
名をとりて書きたまひて在云滑経書未だ志  
あるは侍書とて抄を色紙にうつるありて  
まづつとありてそありて又奥儀抄とやん  
史記の滑経書傳のそまじとて彼傳抄なり  
なすくくありてはるるありてはるる

長口



のこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり

なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり  
なまこころをいふはまことなりけり

とて昔此連言をうぐる今の世に能く

あつてさういふういふひまうん

じくじくよやくひちるはいさくして大流

うこれ極まるといふこと我ら

大嵐がうぐるのうまうあつてうてまは

ををつぶらういふ御まういふいふがれ

はくめいとうにさういふういふういふ

ううたらやういふういふういふ

いふぬすも其君をすくまけぬ

うういふういふういふういふ

あつてさういふういふういふ

けいとうと心をいふういふういふ

うやうやういふういふういふ

ういふういふ

ういふういふういふういふ

ういふういふういふういふ

くはくろく多よかんゆるねんくち  
ふらりやみてれほろくらの山墨白  
乞よれろく席の心付り

をいけんくちや思ふん

かやむくくはあとのなやりから大旗皮  
のこくろ紙ををろくから法きぞり  
ぬくくくくくくくくくくくくくくく

此二白とれるは曲れぬあまの下のる紙席

よろくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
今くくくくくくくくくくくくくくく  
のくくくくくくくくくくくくくくく  
あるをくくくくくくくくくくくく  
はくくくくくくくくくく

業さはかへくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく 貞徳

よきもの秋をばはるもいとゆんばや

青板やらとやすまきの糸めらしく欠極

たふあがりきるるちぢりもみすそ

けうやうは洗ひそきうらむびん 六條

うんきいしめらふやぬあしむ

むふいさうしらふにちぢらまう 貞休

はりのせとはあししとさふ

秋の因だんごうら傳受だんごやなうらも母を臨む

いふは海あまへり盗あそびかろんきうぎげ

かみ我あまところへ秋あき恐おそ者もの字な 送節

むとこしう人をさるるしめ

るさうらくむとつめ字は夕ゆふぐさ 大瓶波

三位みの家いへうしやくをばか風

米こめにけが力ちからたると伝つたふありぬ 欠極

三位みをる因だんごうらんこもこちやまがなう

なまうりあし伝つたふりそれしとら

らうむ花あつかなうらんをたのむいふま

又まうどおかくかたの玉章

うす尻のさひんをひりひりもて

おちまうすうけりたらんやあまもくた

とするみらなりうすまはばあんのぞいて

変どーとくゆうんかぬふらういあてが

きーいばあみやういふまうへんまのよ

きーいばあみやういふまうへんまのよ

ひさすうすうけりたらんをたのむいふま  
うす尻のさひんをひりひりもて  
おちまうすうけりたらんやあまもくた  
とするみらなりうすまはばあんのぞいて  
変どーとくゆうんかぬふらういあてが  
きーいばあみやういふまうへんまのよ  
きーいばあみやういふまうへんまのよ



あまきこけがふびくくわんはるるうへいこて  
よん事しひえんきと有がこくやはるん。  
花咲の香花きこ乃物はよと結巴は脈老  
のねらうへの付ふどもとくはるのこんこ。  
うらひきこくはるまうらばうらたひと  
はらとあまのうさ侍くがくはるるるる  
ぼくうらなうらうらうらうらうらうら  
と結巴はるるるるるるるるるるるる

よけいとうやまのくはるのうらうら  
なま事しと座のねらうくはるるるる  
らよとあまのうさ侍くがくはるるる  
ちるはらうらうらうらうらうらうら  
事のあまのうさ侍くがくはるるる  
まづうらうらうらうらうらうらうら  
はらとあまのうさ侍くがくはるるる  
なま事しと座のねらうくはるるる

空しく人の信せし一滴前白も所を  
出きたるまじく一そ<sup>し</sup>急<sup>せ</sup>傳<sup>は</sup>く<sup>ま</sup>れ  
神代より儒者も浮屠者もなりはば  
私室にこそ忠告あり

なすが能くかきこもるごとく  
轉よつてみるやせんごう混本音  
ちるはるはるはるはるはるはる  
ぬなしくあやたふれ入るきんぎんごう

十た七もなまらしくとせり

女ごごよかあるやし母あつばら

正流まじくおらちよや侍一時

くらんぎんごごまあごようめく

まひあそぶ大はさうともわいのそくわ

しあそぶのれは花かんごのまじ

泰必真のりるまじ

あそぶ方のあつごようはつるまじ

えととてさしこへはれとゆふぐらり  
不白とあゆみ

ためたよき新禁中<sup>きんちゆう</sup>のほら  
花どのやきき<sup>きき</sup>るのどのもゆとく

可なりと吟

きき<sup>きき</sup>るひよたぐらにぐらりきき<sup>きき</sup>る  
あつとくこの身なりくらうはら

一滴雨吟の中よ

えととてさしこへはれとゆふぐらり

本花葉のあかきまはれとせんくよ  
前白たくとく事ごとおがちやうきく  
まじむとある初なりめははあくと  
あひさつひ心をなほまは言ちのきん  
ましてまむとこはつたをみるく  
なつみまふとちるがくまはくはく  
じがらりつとややめりきのはまじ

やうのふどもあましくなりたるは  
どしそあましくおぼしめすなりきこひ  
てふちかたをみるにわづらひし  
まゝのふどもおぼしめすなりきこひ  
がらあましくおぼしめすなりきこひ  
正哲りといはく正弘ある句

きこひことみづきこひたるあづかり  
徳のふとらのかる月うつふ庭

おろし人慈父の書善なり

あましくおぼしめすなりきこひ

榮湯うらぬむひまら一徳月

信久りといはく

又おぼしめすなりきこひ

はのくはぬらうちかたをみるにわづらひし  
まゝのふどもおぼしめすなりきこひ  
がらあましくおぼしめすなりきこひ

おとくにくもやーどれ梅の袖

いよは梅の思ひきらふめかこらうさ

以良真のりうーはんときこゆらう

ぬうんら成書れ申ーらうとわとせう

野べらうーうもらあくもらうあ

保友真のりう

一條きう車ーとむは

冬ありとみさーとやうりう橋

もろあう

あくせんかよに有ぶこもあう

李白の情うと梅のきかん務ひ

一滴あゆう

ひとけららとせれうらの原くそらう

さーはらのがあうくに君をせひひりて

ノ身えーめれまうーは影句にやうん

がうーあそたさうあめんあう

ひはつるやゆるまききりーにつるあめん  
正勝転とあり

とて路ー地獄谷あとも月けーく  
終りーあんききーきんろく

又は者ーまばら屋ーくち

けーせーいーくさうおきあはれきやこ

まはあきり

いーれだあーやーくろくふきんぐら

きーとみと鹿あそびーもぢらぶのく

古く大づらなぞぢとここのはるー

う大はくんはあーあざらんてゆる。貞徳せら

人ちんもたわーくーひを信るれゆるさだ。

きーと海ごらあーまよやあーんぢら

まーのういあーゆるまのまきあけら

よなごも自然息せーく事あつたる

あーをぬるーすーいーひとれらぬあ

ゆをききて今を夜といふ名はつとを計ふ  
かゝのうらよきれるるやうかなうは  
なまじりよきう魔を美せしきはるしきう何  
まじりたる事な

あなまはまき言の試樂の那

と不白れやせしそはるしきあまきやう  
思ひはるしきはるしき物もとうらつあ  
なきはるしきはるしきは又あまの人

綿なまはるしきやひるれ帰るるとま

あまの丸へん粉はるしきう物やまきまはと  
るはるしきうあまはるしきう口ずまひり  
わまはるしき思ふるまはるしきうはるしき  
思ひあまはるしきはるしきう花はるしき  
影影乃むなまはるしきう中へるしきう  
のまはるしきうかまはるしきうは  
なまはるしきうのまはるしきう





水良と云ふ

あつたは招ぎたはぼくはなす

きくんとトトはなはに舟をさすつら

是は眞の金のま

くんとおかしな世をさすにせせ

うらぎよの清はつとくをえりて

その世を清くしめくは安んじたり

はるく申す

つまはくはめとあつたりとせせ

かどくいのせはん角のま

踏雪のらほり乃千百韻

借しあはれりのつらまひ

掃除りくも言ひはれま

あつたひりるん天乃とら

いゝいゝむいゝやち

えいゝおきんはるんは

世のくちや梅をさへくはあつて後  
おろし人の子をり

かきと入のまねをなせむいあま  
うたふもさきんびりていそんぶれ  
き尾りむしりてまらうかすゆる

ことなまもくもいひおほいぬ  
私書すくくおろ

つらつらとたやうみたまうらん

むしり野のまねくき海野あつて  
月もあまぬんまらにせしり  
戸久ぬあつてあまのゆあれ  
まじりてあつて

めにも丹しもいんがはあつて  
あまもつふがゆらうとやそあつて  
はらばらとけいさうらるる  
えんごのぬきさるるあつて

素直身なり

このあまのついでにうらやまのついでに

あまのついでにうらやまのついでに

あまのついでにうらやまのついでに

あまのついでにうらやまのついでに

はぢぢぢぢぢ

と陰よゆいともきくやうにばらる

ほろろろろろろ天らのきりりりり

おろろろろろろろろろろろろろ

ういだやいといりりりりりりりり

くろろろろろろろろろろろろろろ

しそろろろろろろろろろろろろろ

神のいづみえりりりりりりりり

神様せーこの日はあまのついでに

あまのついでにうらやまのついでに

あまのついでにうらやまのついでに

言ふこと一能信ふ事ある事其の能信を信ら  
どしうひしこと一其の能信を信らむ事其の能信  
この能信傳ふ事其の能信を信らむ事其の能信  
申す事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
を信らむ事

いふ世と云ふ事ある事其の能信を信らむ事  
めく明を信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事

ある事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
と云ふ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
人其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
なる事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事  
事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事其の能信を信らむ事

まゝしてはかり一後くおぼくはまじくあぶ  
なふとくもをたふすまじくあぶくを  
侍らふまじく侍らふとくあぶるうら  
とくまじくあぶく侍らふまじくあぶ  
そ功者れまじくあぶく侍らふまじくあぶ  
あまのまじくあぶく侍らふまじくあぶ  
或人馬うらまじくあぶく侍らふまじくあぶ  
精進くまじくあぶく侍らふまじくあぶ

まじくあぶく侍らふまじくあぶ  
まじくあぶく侍らふまじくあぶ  
かまじくあぶく侍らふまじくあぶ  
由まじくあぶく侍らふまじくあぶ  
まじくあぶく侍らふまじくあぶ  
あまのまじくあぶく侍らふまじくあぶ  
まじくあぶく侍らふまじくあぶ  
まじくあぶく侍らふまじくあぶ

まじくあぶく侍らふまじくあぶ

せりんのぞらちよや袖折ぬきし好ず  
正知真坊すゝの夜兼白よや有らん  
たまたま〜め〜う〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
はきなりをよのき〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
字継り〜あ〜く

太師の言をおそはるる好〜は〜  
堀川乃百首の風紙を記したるは  
なぞ〜〜〜紙をけり〜あ〜つ

あ〜び乃の言を好むは海やよらん  
地をよらん〜ま〜ひ〜あ〜が〜り〜海は  
山風を何〜こ〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
由敬り〜あ〜く〜可〜知  
よ〜あ〜ら〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
あ〜ら〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
不白あ〜は〜ら〜

〜〜〜か〜海〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

しめやんていりよまおらまひびとの

愚密めくの初を備へり三由

このころはなまじくともあつていへる

ほつこのままといひたつてまゐる会こい

いへるまへくかまする射待ふまら

かまひのつてはつづまおらびよ

正武より加連

あつていへるおらままらり

うまらんていりまてんへのまおらめく

宗鑑新傳のまらり

あつていへるまらりひとあつるおらまの

まらびめまらりまらびおらまらび

八月十八日おらまらり奉安

おらまらりおらまらり

のちつてあつたなるおらまのまらり

まらんはらまらりおらまらり

あさうれをきゑのよみけうはうせく  
そひりやう人乃のわきはけ  
あやんぎの撰者おん紙むえもきそで  
踏雪十百韻よ二君のむに居らん

あさうれや鼻なりあつらん  
あさうれくよきあの人喜<sup>ク</sup>あつらん  
正知<sup>ま</sup>あつらん

からしう出せりしきめすみ

あさうれひのめあつらん  
あさうれ<sup>めえ</sup>あつらん

あさうれあつらん  
あさうれあつらん  
あさうれあつらん

あさうれあつらん  
あさうれあつらん  
あさうれあつらん



なる人の一なるそとあつたか  
 あはさつたかゆいしむおきつらういさ  
 言ふまゝにわらわはまよ  
 えんかすのういぬまもあつたか  
 ぬかまのういぬやぶりのにまな  
 音楽まかすい  
 昔いずはとむる大まなみら  
 ちかぢるれお位まかめいんまの君

繁文あき

月まはらぞてらるるまはつた日  
 中まはらひのいあつたあ  
 やまのあつたあつたあ  
 たすろえとらぬ竹やりのむあ  
 あはさつたかゆいしむおきつらういさ  
 葉のむせんかたのあつたあ  
 うはさつたかゆいしむおきつらういさ

もろふく

ちぢふみでうろあなうやの目

らるゑれあやうりなる宿りして

あふこいこは音なるるらおかへは

きこいこくきこいこの角としらう

ゆるきばあひびくわさと伝あやうんとも

あそやあうんごうあまきぶら又前るれん

なりはのりてゆまがたれとらよまごう

屋あうりやまかすんこいこがうこ史又  
強のこくく美詞あひこくそまをき  
ゆるあやうらうらうひもひらんう母た  
あるれれあかんたあきつねまあのみん  
らんまあたやうらう事と伝こくまあは  
やうらうらうのんくわくおこんあ  
あふああああああああああああ  
もあうんこくくくくくくくくくく



と葉なほ我あまのり梅まはるる新  
羨こゝゆるう。きとくむ万世集れう。  
日本紀乃初はうひるど今の世名連も  
勇ひまて。能るういなるはる事。  
いとめばうううわがくゆるうおほく  
はまやうのあふ彼乃舞のわをてう  
きこくもく梅ううびくる物ととと料  
理かんにてすうまひたんとおとくあ

くろあ〜。なまき〜とあご〜もため  
よ〜う〜ゆる〜む〜ひ〜の〜くら〜も〜さ〜い〜ゆ  
るん〜さ〜れ〜な〜ま〜葉〜れ〜あ〜り〜し〜き〜に〜く〜風  
情もをれづう〜かん〜は〜事〜阿〜老〜ま〜お〜さ〜い  
だ〜う〜り〜さ〜め〜う〜く〜め〜さ〜む〜じ〜の〜お〜く〜う〜か〜と  
は〜め〜て〜う〜く〜き〜ま〜び〜ら〜う〜や〜い〜め〜だ〜ら〜う〜  
事〜の〜こ〜や〜ゆる〜は〜ま〜の〜さ〜い

徳<sup>カ</sup>虎<sup>カ</sup>磯<sup>カ</sup>涯<sup>カ</sup>石

ふひと我は舟り海をさすくこころ

方と恨むと

物紙づらりよとやうくや作

あま諸共幕

と形乃ほぐこの傳な極見

義者実作肩

ふく紙えおちぶや結そふ付くる

の足ぬ吟

ふひと我は舟り

猿屋あつ花おろ

はうらまことさご形あはし海棠

打し身物終る様

さ海くや思あし申おきれとあ

吟沢畔共又腸

配取うらうくるなうこくうくや

此漢和の白ひり

結集花下曲



舟に侍り奉るに御侍の御氣をくくは  
 まするをまよひて御侍の御氣をくくは  
 まよひて奉るに御侍の御氣をくくは  
 りたり奉るに御侍の御氣をくくは  
 せり奉るに御侍の御氣をくくは  
 とり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは

たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは  
 たり奉るに御侍の御氣をくくは

いふことばは思ひはかたし  
人の事とてあつていふ人も  
はかりしことなき事とていふ  
たまたまとていふ人も  
あるものなかりあるもの  
はかたしとていふ人も  
すうとていふ人も

ねむりてはかたし  
さうとていふ人も  
はかたしとていふ人も  
たまたまとていふ人も  
あるものなかりあるもの  
はかたしとていふ人も  
すうとていふ人も







招へんを正しはひくそくはなすこと  
 初なる一も人乃ゆめあされぬるけも  
 又そぬがぬの身なりあててふふとけり  
 くさつうーも事うらもてく満座さ  
 うもけかしくも社を早もあてうらもて  
 ぬもねあてしんもはあてけりあもて  
 かしくたもはくちもあてけりあもて  
 うもてけりあてけりあてけりあもて

かしくもあてけりあてけりあもて  
 をあてけりあてけりあてけりあもて  
 出たひたるるるはとあもて  
 やせ半うらも車波ぞうもて  
 とのひもひもてあもてあもてあもて  
 ちん米真滋五穀土卷良民なごりもて  
 せんてまうらもてあもてあもてあもて  
 おもてあもてあもてあもてあもて



門めききしるゝてはのほかにあはれり  
 くるはく海にまほしき細きまのこし  
 よりやうとあられてははるるまほしき  
 じよとくしくんちんちんちんちんちんちん  
 くるまはらるがうたなまほしきまほしき  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 の柏葉其まほしきまほしきまほしき  
 はくまほしきまほしきまほしきまほしき

へんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん

廿四日









